

遺伝子医学 MOOK 22号  
最新疾患モデルと病態解明，創薬応用研究，細胞  
医薬創製研究の最前線

最新疾患モデル動物，ヒト化マウス，モデル細胞，ES・iPS細胞  
を利用した病態解明から創薬まで

戸口田淳也，池谷 真 編  
メディカルドウ／B5・276頁・5,600円

それにつけても，いろいろな疾患モデル動物が存在するものだ。つくづくと感銘を覚える1冊である。病気に関与する因子やその候補が分子的に明らかにされるに従い，その生理機能の更なる探求と新たな治療薬や治療戦略を考える上において「疾患モデル動物」の存在は欠くべからざるもの

であることは言を待たない。ここに紹介されている「彼ら」の存在と医療への貢献には深く感謝するばかりである。

また，疾患モデル動物を作ったからといって，その研究が完結に向かう訳でもない。むしろ新たな視点が提供され，より研究が深まっていく。本書はその研究の深みにはまってしまった多くの最前線の幸せな研究者達の物語のようにも思えて，うらやましく感じる。

この本を読んだから，その疾患モデル動物を作れる・使えるとは到底思えない。しかしその研究成果から得られる知見，概念は，大変刺激的である。その手があったか，とハッと気付かされる点も随所に現れる。

本書では35に及ぶ様々な疾患のモデル動物とそれを用いた研究を紹介している。

それぞれの疾患は9つのグループに分けられている(神経，視聴覚，循環器，代謝性，筋原性，骨軟骨，皮膚・炎症，血液，腫瘍性の各疾患)。よくぞここまで多岐にわたって前線の研究者を見いだしてこられたと，編集者の見識の深さにも敬意を感じる。

本書は「遺伝子医学 MOOK」シリーズ中の1冊であるが，このシリーズには優れた文献が多く，出版社にも感謝したい。日本国内にもこれだけ多くの優れた研究者が個性豊かに最前線の研究を推進しており，これら「無形物」への投資が病氣克服という多大な財産を生み出すことは，想像に難くない。

東田道久 Michihisa TOHDA